

來て禁身せられ、程なく没し、家族までも追々死して、家名も絶えたりけり。其屋敷跡をば播州血屋敷といひ傳へたりとぞ。龜尾記に云ふ。血屋敷の事、其の故を知らず。金澤中に凡五・六ヶ所もありといへり。但し其中にも名高き血屋敷は、播州血屋敷なりとぞ。按ずるに、金澤なる播州血屋敷の事は、孝經樓漫筆に云ふ。江戸番町に血屋敷の事あり。其殺せる女の名を菊といふ。又白石紳書に、加賀に小幡播磨といひし人、飯の中に針ありしとて殺せし女の名も菊といふよし。皆ゆかりあるやうの人を殘さず取殺せりと、奇怪の事ならずや。と記載す。白石紳書に則ち如左載せたり。

小瀬復庵、^(改稱)此年九月廿一日に語りしは、加州に昔小幡播磨といひし人あり。下女に菊といひし女ありしを殺せり。それは飯の内に針の有りしをもての故なり。菊死にのぞみていひしは、此事われ知る事にあらず。然るをまげて殺さるる事こそ恨めしけれ。見よ、播磨のゆかり有程の人までも、殘らず此恨をおもひ知らすべしといひて、切られしといふ也。其後先づ小幡が家は絶果て、其後或は外戚或は

ゆかり有程の者の子共よりして、ひた死に死して殘る者すくなく成りしほどに、有賀内膳といひし者の子共も次第に死し失せし程に、内膳が子に平三郎といひて奥小姓にてありしもの、江戸へ供し來りて上屋敷にあり。惣じて、奥小姓は外様とちがひて、居る所へ外より人の入來る事もならず。さる程に平三郎頗ひ出して、ひた重りに重くなる。親類なども太守へ願ひ申して看病に來り集り居たるに、馬子の裏所に入來りて駄賃を乞ふ。こはいかにといへば、今爰に來りし人の乗りし馬也といふをとへば、女を一人乗せ來りしといふなり。心得ず。如此の奉公人にて、女など有るにてもなし。いかでかゝる事をばいふぞといへば、我もまたさなき事いひて此所まで來るべしや。さりとははあらぬ事をいふ人々やとあらそふほどに、まづ裏の門をばいかにして入り來りしにや。門よりしてよのつねだに人の入り來るをば告げ來るに、その事もなき猶心得ずといへば、門をば何事もなく入り來りたり。誰咎むる人もなかりしといふ。平三郎が家にておとなしく召仕ふ者、是を聞付けて、又々例のものゝ來りし也。力なし。とかくいはん事しかる

べからずといひて、價を取らせて門へつれ行きて、歸すべしといひしかば通したり。其時にかの馬子の入り來るをば、いかでこなたへ告しらせすしといわれしといへば、門の番人、されば今も皆々つおやきし事なり。不思議の者を通すべしとはいかにも知らず。いづれの門よりや入りぬらんといひしに、扱爰より入りしといひし事也。誰々も見ず。とやかくいひ出でんは、たがひの爲めしかるべからずとて、いふ事もなくなりて、程なく平三郎も死したり。かの菊が來りしと見えしこと心得ず。加州よりはるかの道を馬を借りて來りし、いよゝあやしき事なりと語れり。

某いふ。よき事を聞きしものかな。申生の厲の車馬に乗りし事を、申生こそはあらめ、車馬にも魂魄や有るべき、心得ぬ事也と、古人のいひし事あり。理りなる事なりとおもひしが、其申生の車馬も、則かの馬子の馬の如く、實の車馬をいかなる事によりてかかり用ひて、それに申生の魂乗り來れるなるべし。馬も馬子も實の馬と馬子なるものゝ、門を入る時に番人の見も咎めぬ、是また不思議なり。既に女のおもふ所に入りし後には、馬も馬子も有りしまゝの馬と

馬子となりし。是亦希有の事也といふ。扱また復庵いふ。今も其ゆかりの者あるがいふ也。たとへば蔭繪にても、染めし物にても、繡したるものにても、菊の形のある物を見る事はいふにや及ぶ。戸を隔てゝもそれらのものあるもこなたに覺えてうるさくなる。ましてや眞の菊花などおもひもよらぬ事なりと心得ぬるなりといひき。とあり。今按ずるに、右同書に、此の前條に己亥七月六日加州小瀬復庵來る云々と載せたり。されば此年九月廿一日に、血屋敷の菊が怪異を語れるよし載せたる此年も、則ち同年なるべし。己亥は正保四年なり。有賀平三郎の死したるも同年ならんか。

○北、家中

舊藩中は、長氏の下邸の一ヶ所にて、家士の邸地也。世人北の家中と呼べり。龜尾記に云ふ。北の家中といふも、長家能登に在所たりし頃よりありし下邸の一ヶ所にて、北の方英町の尻地は後に請地になしたる地なり。故に地子銀を取立るなり。とあり。此の下邸は、長氏居邸より北方に當れるゆゑに、北の家中と呼べり。明治四年戸籍編成の時より芳齋町に屬せり。